

平成 27 年度放射線安全取扱部会年次大会 (第 56 回放射線管理研修会) 概要報告

平成 27 年度放射線安全取扱部会年次大会実行委員会

まえがき

平成 27 年度放射線安全取扱部会年次大会（第 56 回放射線管理研修会）が平成 27 年 11 月 26 日（木）、27 日（金）の 2 日間にわたって、金沢市文化ホール（金沢市）で開催されました。今回の年次大会は中部支部が担当し、初めて北陸の金沢市で開催しました。会場の金沢市文化ホールは金沢市の中心に位置し、交通の便も良い場所で、観光のしやすさも考慮して決めました。開催期間中は雷と霰を伴う荒れた天候となってしまう、会員の皆様方には金沢の名所・史跡ではなく、北陸特有の冬の典型的な天候を体験していただくことになってしまいました。参加者は 422 名（うち一般参加者 18 名）と北陸新幹線効果もあったのか、大変多くの方に参加していただきました。

今回の年次大会のテーマを「放射能・放射線の情報を正しく発信するには」にしました。これは、福島第一原子力発電所事故以来、放射能・放射線に対する負のイメージがますます強くなってしまいましたが、それは、一般の人の放射能・放射線の知識が不足していること、放射能・放射線の専門家の情報発信の仕方や情報を伝えるメディアの態度に問題があったかと考えております。そこで、今回は放射能・放射線がどのように利用されているかをあらためて知っていただくことやメディアを通じた情報の発信及び情報の読みとり方についても学ぶ機会が得られればと考え決めました。

内容としましては、3つの特別講演と3つのシンポジウムを実施しました。ポスター発表は 40 演題でした。交流会には 248 名と多くの方に参加していただき、各地域からの会員同士で様々な交流が図られたと思います。



写真 1 部会総会



写真 2 平成 27 年度功労表彰（右より木村捷二郎氏、泉雄一氏、西澤邦秀氏、桑原幹典氏、宮越順二部会長）

本年次大会の詳細については、セッションごとの概要報告をご覧ください。今回は周囲の多くの方々から心配されるほど、準備の立ち上げが遅く、1か月前ようやく第2回の実行委員会を開き、大まかな実行委員の役割を決めました。最終的にしっかりと固まったのは1週間前位でしたが、何とか大我もな

主任者 コーナー

く無事に年次大会を終えることができました。これも、実行委員をはじめ関係者の多くのご協力と、ご参加いただきました皆様並びに協賛企業のおかげです。厚く御礼申し上げます。

(柴 和弘 (実行委員長))

特別講演 I

「放射性同位元素等の規制に係る最近の動向」

(原子力規制委員会原子力規制庁長官官房
放射線防護グループ放射線対策・保障措
置課放射線規制室室長 島根義幸氏)

本講演では、まず島根義幸氏の自己紹介、休日の過ごし方などをお話いただき、私どもの肩の力を抜かせていただいた後、“最近の事故・トラブル事例”，“立入検査の実施状況”，“安全文化の醸成”，さらに“放射線安全取扱部会の取組”，“核セキュリティに係る最近の動向”の順にお話をいただいた。

最近の事故・トラブル事例では、平成 22 年度～平成 27 年度には 21 件の法令報告事案が発生し、11 件が「線源の紛失・誤廃棄または盗取」、10 件が「汚染・漏えい」と、類似事案が多数発生しているとのことであった。この原因として、知識・経験の共有が不十分で、組織として人材の育成がされておらず、安全文化の欠如といえる“組織と個人双方における安全最優先の価値観の欠落”，“現場における意識の低さ”が指摘された。立入検査においても類似の指摘事項が多く、安全文化の欠如と言わざるを得ない状況にあるとのことであった。

このような背景を通して安全文化の醸成の取組の必要性に触れられ、安全文化の構築のための 4 つのポイントが示された。それらは、1) 現場の人間が誇りと責任感を持って仕事に取り組める組織文化、2) トップマネジメントのコミットメント、3) 現場と管理層、またベテランと若手との間の意思疎通を目指した対話、そして 4) 安全文化の劣化を防ぐために必要となる組織および個々人の「常に問いかける姿勢」とのことであった。放射線管理に従事する者にとって、これらの重要性は常日頃から感じている。しかし、事業所全体が自ずとこれらを考えなければならぬ原子力事業者などとは異なり、一般企



写真 3 特別講演 I

業や大学等においては放射線管理に係る部署の規模は小さく、トップマネジメントの意識を変えていくのは難しい。原子力規制庁としては、そのことについては理解しているとのことであった。さらに、現場の放射線取扱主任者の孤立化や過度の負担について触れられ、放射線安全取扱部会に対して、1) 放射線取扱主任者同士の忌憚のない意見交換が可能なネットワークを作る場としての活動、2) 個々が抱える課題等を把握し、それらに対しての具体的な提言等を纏めるような活動をしてはどうかとの提案もなされた。

放射線取扱主任者をはじめとする放射線管理に関わる人員配置やその地位などは事業所ごとに異なっており、それぞれの事情に応じて何らかの課題を抱えているであろう。どの課題も容易な解決は難しいことが多く、前述の提案のように放射線安全取扱部会として取り纏めた上で提言として示すことを考えてもよいであろう。いずれにしろ、放射線管理に携わる者としては、各人のおかれた状況にかかわらず、今やるべきことはやりこなしていくという姿勢は大切なことと考える。

(矢永誠人)

特別講演Ⅱ（一般公開）

「歴史と文化のまちづくり」

（前金沢市長，石川県中小企業団体
中央会会長 山出 保氏）

山出 保先生は5期20年間（1990～2010年）金沢市長として金沢市の発展に尽力されてきた。本講演では，金沢市の歴史的背景から，歴史の保存と開発との調和や伝統文化と新しい現代文化との共存，金沢市の産業等について，ご講演いただいた。山出先生は和服姿で凜とした佇まいで，洗練された内容，説得力のある話しぶり，落ち着いた物腰など，我々にとって大変参考になる講演だった。以下にその内容を紹介する。

はじめに，金沢は加賀藩（14代）時代から計430年にわたり，戦争被害を受けていない世界でも希有の街であり，金沢は「歴史に責任を持つべきまち」であると述べられ，金沢市の歩むべき方向性を示された上で，金沢市のまちづくりの基本についてお話しされた。

1つは，「保存と開発の調和」であり，保存すべき町並みや建築物と新しく現代的に作り直す開発すべき場所をうまく区別することである。もう1つは，「伝統と現代の共存」である。これは伝統ある文化を継承していくとともに，現代の文化も取り入れることにより，同じ街の中にまったく正反対の文化が対称的に配置されることで，調和がもたらされ共存できるというものである。金沢では，金沢城を復興させる計画を長期間にわたり行っている。また，昔ながらの町並みの保存にも力を入れており，ひがし茶屋街，主計茶屋街，寺町寺院群などが，重要伝統的建造物群保存地区として国から選定されている。また，金沢には世界的に有名な現代の建築物として，21世紀美術館と金沢駅がある。21世紀美術館は世界の美術家・建築家から注目される現代美術館となっており，金沢駅は世界で最も美しい駅ランクで6位と世界的に知られている日本で一番美しい駅となっている。このように金沢は古い歴史ある建物と現代的な建物が融合し，調和した町並みとなっている。

文化の面においても，加賀宝生流の能，金沢金



写真4 特別講演Ⅱ

箔・漆器，加賀友禅，九谷焼や和菓子，加賀料理などの伝統文化が脈々と受け継がれている。一方，新しい文化の振興にも力を入れており，市民がいろいろな芸術活動を行える金沢市民芸術村の創設や金沢ジャズフェスタの開催，県レベルでも，アンサンブル金沢オーケストラの創設など，金沢市民に親しまれている。

金沢市の観光戦略についての話もあった。金沢を古都や小京都として見るのではなく，430年間戦禍にあわなかった金沢の魅力は歴史の多層性や文化の多様性にあると話しておられた。最後に，「金沢らしさ」とは，「親しみ」，「癒やし」，「こだわり」，「思いやり」であると述べられ，講演を終えられた。

各地域から参加した会員の方にとって，金沢のことを知る大変良い機会であったと思われた。

（柴 和弘）

特別講演Ⅲ

「小動物 PET/SPECT-CT 装置を用いた *in vivo* 動物研究の現状と将来性」

（浜松医科大学メディカルフォトンクス
研究センター分子病態イメージング
研究室教授 間賀田泰寛氏）

間賀田氏は，長年，分子イメージング研究に従事され，現在も浜松医科大学メディカルフォトンクス研究センターの副センター長としてご活躍されている。今回の講演では，分子イメージング研究の中で

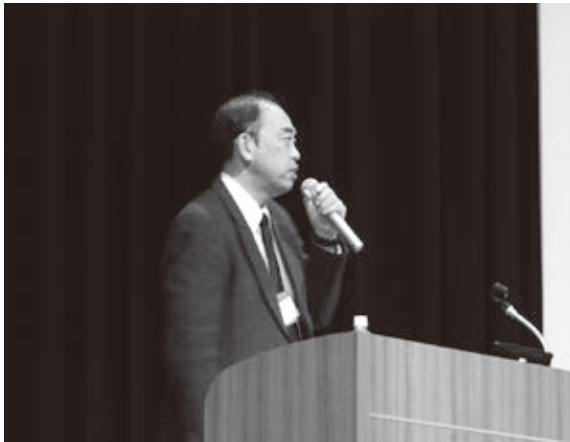


写真 5 特別講演Ⅲ

も、小動物 PET/SPECT-CT 装置を用いた小動物インビボイメージング研究について講演していただいた。最初に、浜松医科大学のイメージング研究の体制について概略をご紹介いただき、小動物イメージングの概要について説明していただいた。小動物イメージングでは遺伝子改変モデル、外科的疾患モデルが利用可能、全身スキャンが容易であり、投与放射能も少なく作業員の被ばくが少ないなどの長所を有する反面、霊長類とは異なるためモデルの選択に慎重を要すること、採血量が少ない、定量分析法に工夫が必要といった短所もあること、また、実際に用いられる放射性核種と放射性医薬品について解説された。イメージング薬剤を小動物へ適用する際の注意点としては、薬剤の親和性、体内動態や代謝などに種差による違いが存在すること、体重当たりの薬剤の投与量（化学量）が、ヒトよりも多くなることもあり、そのためには高い比放射能を有する化合物を用いる必要があること、動物種により、投与可能な容量（液量）が異なるため、放射能濃度を考慮に入れた製剤化が必要であることを、 ^{11}C -Raclopride 時間放射能曲線についてヒト脳とげっ歯類（マウス、ラット）で比較したデータや、比放射能と受容体密度の関係の計算例、動物種と大きさと放射能量、投与可能容量の関係性を示して具体的に説明していただいた。また、PET や SPECT の原理と装置の発展について、模式図や実際の装置の写真をふんだんに用いて、わかりやすく説明していただいた。

さらに、小動物インビボイメージングの研究例に関して、1) 生理学的・病態生理学的研究、2) 創薬研究、3) TR 研究（トランスレーショナルリサーチ：基礎研究の成果を臨床へとつなげる橋渡し研究）の3つの観点から、小動物 PET, SPECT を用いた研究例を挙げて、豊富なデータに基づいて紹介していただいた。

以上のように、小動物インビボイメージング研究について、豊富なデータに基づき、イメージング研究を専門としない放射線安全取扱部会の参加者にも分かりやすく解説していただいた。小動物と霊長類とでは種差が存在し、ヒトへの臨床適用には慎重を要するものの、小動物イメージングを用いることの有用性が示され、今後の発展に期待を抱かせる講演であった。

（北村陽二）

シンポジウム I（一般公開）

「核医学による最新診断および治療法」

シンポジウム I は、放射性同位元素を用いた画像診断や治療の最先端について、主任者だけではなく、一般市民にも分かりやすい言葉で紹介するというコンセプトのもとで行われた。今回、高齢化社会が進んでいる我が国でますます患者数が増えることが予想されている「アルツハイマー病」、「心臓疾患」、「がん」の最先端の医療について3人の先生に話題を提供していただき、その後、会場を交えて討論を行った。座長は川井恵一氏（金沢大学医薬保健研究域）であった。

最初の演題は「アルツハイマー病の最新診断法」で、講師は岡村信行氏（東北大学大学院医学系研究科）であった。岡村氏は、アルツハイマー病の画像診断では、アミロイド β ($A\beta$) イメージングを標的とした研究が先行していたが、 $A\beta$ 凝集はアルツハイマー病の発症・重症度と相関性が低いという問題点があり、発症前診断の根拠としては推奨されていないことを指摘された。そして近年、アルツハイマー病の発症・重症度に相関性が高いタウ病変が、画像診断の標的として注目されていることを紹介され、既にタウ PET イメージングにより、アルツ



写真6 シンポジウムⅠ（右より岡村信行氏，中嶋憲一氏，絹谷清剛氏）

ハイマー病患者の脳内集積が臨床症候や脳萎縮所見と密接に関連していることを解説された。

2番目の演題は「心臓疾患の最新診断法」で、講師は中嶋憲一氏（金沢大学医薬保健研究域）であった。中嶋氏は、核医学による心臓イメージングは、負荷時心筋虚血の診断や代謝情報の診断に標準検査法として活用されており、その診断結果の数値を基に、薬剤治療や血行再建術など、治療方針の決定を行うことを説明された。そして、SPECTの高感度カメラや多焦点コリメータなどのハードウェアや、心筋SPECT専用の定量ソフトウェアが日々進歩しており、また診断基準のスコアの統一化など診断精度が向上し、個別化医療の中でますます重要になると考えられると紹介していただいた。

3番目の演題は「核医学における最新がん治療法」で、講師は絹谷清剛氏（金沢大学医薬保健研究域）であった。絹谷氏は、がんの治療において、国内ではβ線放出核種（ ^{131}I など）を使ったアイソトープ治療が保険診療として行われており、またβ線より高い治療効果が期待できるα線放出核種（ ^{223}Ra など）が国内での使用が可能になる見込みであることを紹介された。また、アイソトープ治療を行える病室数が大幅に不足しており、国家レベルでの改善策が必要だと提言された。

総合討論では、会場から各講演について質問があり、「核医学による最新診断および治療法」というテーマへの会場の高い関心がうかがわれた。主任者および一般市民の双方にとって、「アルツハイマー

病」, 「心臓疾患」, 「がん」という身近な疾患の臨床現場での放射性医薬品の利用について勉強する良い機会になったと考えている。

（小阪孝史）

シンポジウムⅡ

「メディア・リテラシーを考える」

原発事故後、メディアで放射線に関する話題が多く取り上げられるようになった。しかし、それによって国民の理解が進んだとは思えず、却って思い込みが極端化した感もある。この状況下で私たちができることを議論するために、本シンポジウムが企画された。

最初の講演は、矢鋪祐司氏（日本たばこ産業(株)）による「放射線メディア・リテラシー」であった。一般に、情報には「真実」, 「事実」, 「脚色された事実」, 「物語」, 「プロパガンダ」があるが、メディアが伝える情報は後者3つである。読者が「脚色された事実」から「真実」や「事実」を捉えることができるのか。これを後押しする策はすぐに思い浮かぶものではないが、専門家としてなすべきことを継続的に考えていこうという呼びかけがなされた。

2番目は、小島正美氏（毎日新聞社）の「メディア側から見たメディア・リテラシー」と題する講演であった。記者の多くが最重要視しているものは「市民からの共感」と「弱者への視点」であり、科学知識の伝達ではないことへの注意喚起がなされた。メディアが偏った情報を発した場合、専門家はどのように対応すれば良いのか。小島氏はメディアを監視し、誤った情報に対してタイミング良くカウンター情報を出すことが有効であると指摘し、食品安全委員会がFacebookで記事の誤りを指摘するメッセージを発している事例を紹介した。記者がそれを目にしたことでその後の報道の論調が変わったケースもあるとのことで、放射線についてもこのような仕組みが必要ではないかとの提言がなされた。

最後の講演は森本洋介氏（弘前大学）による「オーディエンスとしてのメディア・リテラシー」であった。最初に、情報の絶対的な発信者あるいは受信者がいるわけではなく、相対的な存在であるこ



写真7 シンポジウムⅡ（上段右より矢鋪祐司氏、小島正美氏、森本洋介氏、下段 松田尚樹氏）

とが述べられた。その上で、メディア・リテラシーとは「情報を様々な角度から根拠を持って検討し、考えたことを自ら発信すること」と定義した。すぐのできることにして、「作者は誰で、目的は何か」、「注目されるためにどのような技法が使われているか」、「異なる立場の人がどのように理解するか」、「提示あるいは除外されている視点はなにか」という問いをあらゆる情報に投げかけて考えていくことが効果的である、と述べられた。

総合討論では「一つのメディアにも様々な記者がおり、異なる視点に立った記事が同一紙に載ることもある。メディア情報を正すためには多くの記者に接触することが重要」、「誰に理解してほしいのかを整理した方がよい。全ての人に、というのが理想ではあるが、現実的ではない」等の意見が交わされた。最後に、「メディア・リテラシー」、「ラーニング」、「コミュニケーション」を組み合わせ、「放射

線文化」を創り出すことに取り組んでいきたいとの座長（松田尚樹氏（長崎大学））のメッセージで締めくくられた。

（小島康明）

シンポジウムⅢ

「放射線施設改修工事および廃止における注意点」

全国の多くの放射性同位元素取扱事業所で施設の老朽化やRI利用の減少に伴う施設の改修や施設又は事業所の廃止を考えているところがあると思われる。シンポジウムⅢでは、施設の増築・改修や放射線発生装置使用施設の廃止について、いろいろな経験や問題点・注意点についてお話しいただいた。

最初は柴 和弘氏による「金沢大学学際科学実験センターの改修工事」の講演であった。金沢大学のアイソトープ総合研究施設では、耐震改修工事に伴い宝町地区のRI施設が使用できなくなることから、最初に、RI実習を取り入れている学部・学科にRI実習の日程を調整し、カリキュラムの変更を依頼すると共に、早い段階から利用者説明会を開催し、利用者がRI実験の継続のための計画を立てやすいように様々な情報を伝える努力をしたと話された。変更申請書作成のためには必要な図面や排気・排水設備能力等を早い段階から大学本部施設部や設計業者と打ち合わせるのが重要であると強調していた。

2番目は「北海道大学アイソトープ総合センターの増築・改修工事」という演題で、野矢洋一氏による講演であった。当センターは新館の増設および本館の全面改修が認められた。増設・改修にあたって最も重要視した点は施設の全体構想であり、利用者の様々な研究形態や将来的なRI利用形態の変化に対応できる設計を行ったとのことであった。変更許可申請は放射線規制室との事前打ち合わせ→本申請→許可までに、6か月程度（本申請から3か月）見ておく必要がある、工事着工や工事竣工から逆算して申請書作成を行う必要があることが紹介された。

3番目の演題は、「医療用サイクロトロン施設の廃止について—九州大学サイクロトロン施設撤去工事に携わって—」で遠藤正志氏（(株)千代田テクノ）の講演であった。法改正により、放射化物管理



写真8 シンポジウムⅢ (左上より柴 和弘氏、野矢洋一氏、左下より遠藤正志氏、宮崎吉春氏)

が必要となり、放射化を伴うサイクロトロン施設の廃止については、計算による放射化範囲の特定・実測による確認および除去（汚染の除去）、そして除去後、汚染が無いことの実測確認、を行う必要がある。測定は、コンクリートのコア抜きによる放射化の実測と鉛ブロックによる周囲の遮蔽とNaIサーベイメータによる放射化の直接測定について紹介された。サイクロトロン施設の廃止の場合は解体方法、搬出方法・経路、放射化の範囲の確定・確認の方法、廃棄物量を減らす工夫および経費・時間をあらかじめ考慮しておくことが重要であると述べられた。

4番目の演題は、「先端医学薬学研究センターの廃止措置計画」で宮崎吉春氏の講演であった。当センターの場合は、事業所の廃止であり、1) 廃止届、2) 廃止措置計画、3) 廃止に伴う措置の報告書の順に進めて行く必要がある。放射化の評価には計算による理論評価と壁のボーリングの実測評価を一致させる必要がある。また、壁のボーリング本数を少なくするため金箔を使った放射化法による熱中性子分布を調べることが費用削減に効果的である。廃止措置計画書は的確・簡便に記載し、細かい部分は変更届を出しながら進める方が運用しやすいなどの話があった。

(柴 和弘)

ポスター発表

施設管理・運用・リスクに関するもの17件、教育訓練・啓発活動7件、震災・地域貢献・環境放射能に関するもの8件、分科会・委員会・支部報告から8件、総数40件のポスター発表がなされた。審査委員会において審査を実施し、特に優れたポスターとして、最優秀賞1件、優秀賞2件を表彰した。

【最優秀賞】

柴原卓彦氏（伊勢赤十字病院）「伊勢志摩地区の医療機関における一般撮影入射表面線量の調査および最適化について」

患者表面入射線量測定装置等が十分に整っていないクリニック等に出向き、入射表面線量を測定、診断参考レベルを上回る場合には、説明と線量低減までサポートするといったきめ細やかな対応についての報告であった。今年6月、わが国初の独自の診断参考レベルが示されたが、小規模施設では、施設の装置が診断参考レベルを超えているかどうかを確認することは、資機材の面からだけでなく、技術的にも大きな壁がある。このような状況をいち早く察知し、地域基幹病院の使命を最大限に果たそうとする積極的な姿勢には、頭が下がる思いであった。このような活動が、多くの医療人に対して被ばく低減意識を高める大きな一歩になればと期待している。継続していくことはさらに難しいが、今後も是非、このような活動を広めていただきたい。

【優秀賞】

廣田昌大氏（信州大学）「USB 接続機能付線量計を用いた簡易型エリアモニタの構築」

エリアモニタは高価であり、複数台設置することが難しい施設も多い。紹介された簡易エリアモニタは、低価格であるとともに、線量測定部分以外は汎用機器で対応できるという点でも優れている。将来、既存のエリアモニタと同等な取扱いが認められれば、低予算でも質の高い管理が可能になり、大変有用なものとなるであろう。

【優秀賞】

岩崎智之氏（愛媛大学）「愛媛大学学術支援センター放射線教育支援室の取組み」

愛媛大学では、放射線教育を支援するため、放射

主任者 コーナー

線取扱主任者だけでなく、文系教員を含めた構成のセンターを設置しており、人材の豊富さに驚いた。教育対象や内容については、試行錯誤の結果、大学の看護学生への放射線教育において、双方が満足していく教育を実施することができたとのことであった。今後は、地域、次世代に対する教育への貢献にも期待したい。

ほかにも、放射性有機廃液の軽減のために、液体シンチレータの代わりにプラスチックシンチレータを用いて、既存の液体シンチレーションカウンタで測定するといった画期的な方法や外国人留学生への施設利用説明や教育訓練において、「これならできそうだな」と思わせてくれるような工夫満載の内容についての発表があった。全体の発表を通して、普段、施設利用者からは、「安全に管理して当然」と思われがちな施設管理であるが、これらは、管理者の日々の努力・工夫のたまものであるということを実感するものであった。

(横山須美)

中学校・高等学校の教員を対象とした放射線教育の報告

(放射線安全取扱部会部会長/

京都大学生存圏研究所 宮越順二氏)

放射線安全取扱部会部会長の宮越順二先生より、放射線教育資料作成ワーキンググループ(WG)により作成されたテキストを使用した研修会の開催経過並びにこれまでのアンケート調査のまとめの報告があった。平成26年3月～平成27年10月までの1年半の間に11回の研修会が開催された。アンケートにより、「放射線教育テキスト」各章(第1章～第6章)ごとに「わかりやすさ」を5段階で評価してもらった。3以上の評価は全体の90%を超えており、作成した資料は、理解を得るのに十分なものであると考えられた。これらのアンケート結果をブラッシュアップの参考にしていくとのことであった。また、日本アイソトープ協会のホームページに掲載されている「放射線教育テキスト」のダウンロード実績を見ると、中学校・高等学校教員よりも、大学、研究機関、医療機関が多いということであ

った。今後さらに、研修会を開催し、テキスト内容、教育研修時間など、改善する予定であるとの報告があった。

(柴 和弘)

大会まとめ

今回の“大会まとめ”は宮越順二先生(部会長)が座長となって進行を務められ、ポスター発表、シンポジウムⅠ、シンポジウムⅡ、シンポジウムⅢの座長を担当された先生方に一人一人壇上に上がって、それぞれのセッションのまとめを述べていただいた。

ポスター発表は40題あり、石垣靖人先生から、多くの人に参加していただき、活発な討論が行われたことに対し謝辞が述べられた。また、ポスター受賞者の演題と氏名が読み上げられ、会場から大きな拍手が送られた。

シンポジウムⅠ「核医学による最新診断および治療」は、一般公開講演として開催した。内容は一般の方にとって特に興味あるアルツハイマー病、心臓疾患および「がん」に関する画像診断や治療についての講演であり、大変参考になったことが報告された。

シンポジウムⅡ「メディア・リテラシーを考える」は、座長の松田尚樹先生から、放射線に関する情報についてメディア側、一般市民および放射線の専門科がそれぞれの立場で情報とどのように関わっていけば良いのか考える良いきっかけとなるシンポジウムだったことが報告された。

シンポジウムⅢ「放射線施設改修工事および廃止における注意点」は、柴 和弘先生からまとめの報告があった。まず、放射線施設の改修工事では、将来的な施設の全体構想を持って改修を行うことが重要であり、それから、利用者にできるだけ不便をかけないようにきめ細かい説明を行うこと等が重要であることが報告された。サイクロトロン施設の廃止については、放射化の範囲を特定するための計算と実測を一致させることが重要であるとの報告があった。また、事業所の廃止の場合は、廃止計画書は的確・簡便に記載し、細かい部分は変更届を出しながら

ら進める方が实际的であることが報告された。

(柴 和弘)

相談コーナー

今回の相談コーナーは、大会1日目（11月26日）12:00～13:30までの90分間、大ホールのホワイエで開設された。相談数は15件であった。1人で複数件の相談をされる方もあり、相談開始の12:00前から終了時間の13:30過ぎまで相談時間を超えて疑問に思ったこと、日頃困っていることを熱心に相談されていた。

相談は各支部から1名、法令検討専門委員から1名、日本アイソトープ協会から2名、計10名の先生方に2人1組で1) RI供給・廃棄、2) 放射線管理・法令、3) 大学等の放射線施設、4) 非密封線源及び非密封線源使用施設、5) 密封線源及び密封線源使用施設・放射線発生装置使用施設の5つの窓口にて対応していただいた。

お忙しい中、相談コーナーを担当していただいた先生方に深く感謝申し上げます。

相談内容は、放射線測定及び汚染検査の方法、健康診断の方法、放射性有機廃液の処理方法、実験時のRI使用器具の明確化、老朽化した設備の対処方法、放射化物の管理、放射線安全管理体制等について具体的にどのように対応すればよいかとの相談が多く寄せられた。

また、相談者は、近くに相談相手がおらず、管理担当者1人では解決できない状況にあることがうかがえ、直接、顔を合わせて相談できる相談コーナーに期待されていることもうかがえた。

なお、相談を受けた内容は、私自身も現場管理で困った内容と一致することが多く、相談者に同化し、相談者の立場になって解決策を考え、回答させていただいた。

年次大会の相談コーナーは、相談窓口の数も多く、相談員自身が現場で豊富な経験を持っており、実務に近い質問にもお答えできるので、些細なことと思っても疑問点や困ったことがあれば気軽に立ち寄りいただき相談していただければと思う。

来年も多くの方々が相談コーナーを利用され、問



写真9 相談コーナー

題が少しでも解決し、心が晴れて職場に戻られることを願っている。

(小須田 誓)

交流会

交流会は、11月26日(木)18:00から金沢ニューグランドホテル4階金扇の間で開催された。今回の参加者数は240名ということで、例年にもまして多くの参加が得られたとのことであった。

会は、ウェルカムドリンクと楽器の演奏で始まった。ハープ（日本語では竖琴ということになるか）のソロで最初に映画音楽など3曲が演奏された。演奏者は上田智子さんで、上田さんは名だたる国際音楽コンクールなどで受賞をされ、全国で活躍されるかたわら石川県でハープアンサンブルを結成し代表を務められているとのこと。ソロでの演奏の後、サプライズで柴和弘実行委員長がチェロを携えて登場し、ハープとのデュエットでサンサーンスの“白鳥”を演奏し、会場から拍手が湧き上がった。

その後、柴実行委員長の開会挨拶、放射線安全取扱部会 宮越順二部会長の挨拶、日本アイソトープ協会 二ツ川章二専任理事から祝辞と乾杯の発声をもって、食事と歓談が始まった。美味しい料理と各種のお酒を前に、参加者同士が大いに交流を深めている様子が見られた。

しばらくして、同日特別講演をしていただいた山出保 前金沢市長（現在、石川県中小企業団体中央会会長）から挨拶があった。挨拶の中では、金沢の

主任者 コーナー



写真 10 ポスター賞受賞者と実行委員長

魅力について触れられ、大会の後にぜひ観光も楽しんでくださいということであった。また、この後、ポスター賞の発表と表彰が行われた。本大会の最優秀賞は伊勢赤十字病院 柴原卓彦様、優秀賞は信州大学 廣田昌大様、愛媛大学 岩崎智之様が受賞された。

会の終わりには、次年度の年次大会について井上浩義関東支部長から、鎌倉において、平成 28 年 11 月 10 日、11 日の日程で開催されるという案内があった。最後に、矢永誠人実行委員から閉会の挨拶があり、盛会のうちに交流会が終わった。

(小山修司)